

〔博士論文審査要旨〕

申請者：王 志

論文題目 製造現場における戦略的原価体制の再構築にむけての研究

審査員 尾畑 裕
中馬宏之
挽 文子

本論文の目的は、原価改善の問題をとりあげ、現場改善の成果が必ずしも会計的に評価されないという問題をどう解決するかについて検討することである。トヨタにおいて長い間進められてきた原価低減とリードタイム短縮という2種類の現場改善が、トヨタにおいてどういう位置づけで行われてきたかを検討し、2000年前後のトヨタにおける会計制度改革が現場管理にどのような影響をおよぼしたかという評価をふまえ、原価低減とリードタイム短縮を同時に評価する手法としてのJコスト論がどのような貢献をなしているかについて評価している点に本論文の特徴はある。

本論文の長所は、次のとおりである。

第1に、近年原価管理の領域においては、原価企画の文献は非常に多数公表されているが、現場における原価改善の問題を扱った研究が少ない。その点、本研究は、現場における原価改善を対象をしばって深く検討しており、きわめて貴重な研究であるといえる。

第2に、現場においてできることはなにかという視点から、原価改善の内容を狭義の原価低減に限定せず、リードタイム短縮を視野にいれて検討している点が評価できる。とくに、リードタイム短縮を顧客から見たリードタイムと調達・生産のリードタイムにわけて検討したうえで、リードタイム短縮がどのように収益を拡大し、利益増大に貢献しているかについても検討している点が評価できる。

第3に、トヨタにおける原価管理の系譜を原価低減とリードタイム短縮という2つの軸から整理して説明している点も評価できる。トヨタ生産方式も一枚岩ではなく、さまざまな解釈、流派があり、それがどのようにからみあってトヨタにおける原価管理を形づくってきたかについて示唆を与えている点は評価できる。

しかし、本論文にも問題点がないわけではない。その1つは、トヨタにおける2000年前後の会計制度改革がなぜ行われることになったのかについて、かならずしも客観的に解明できていないことである。本論文は、Jコスト論を提唱した田中正知氏の主張にひっぱられて、トヨタにおける2000年前後の会計制度改革を否定的にとりあげすぎているところがある。もっと中立的に、多くのエビデンスから2000年前後の会計制度改革がなぜ行われたかについてその背景をつつこんで検討してみる必要があったのではないと思われる。

ただしこれは本論文の長所を損なうものではなく、筆者の今後の努力と更なる研究で克服が可能である。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。